

## 入学宣誓式を挙行了しました

4月4日（金）、吉備国際大学、吉備国際大学短期大学部、順正高等看護福祉専門学校3校合同の入学宣誓式を行い、新入生709人が期待を胸に本学での新生活をスタートしました。

今年の入学宣誓式は、新入生の門出をお祝いするかのようにより桜が満開に咲き誇り、保護者や来賓、教職員や関係者など合わせておよそ800人が見守る中、吉備国際大学・吉備国際大学短期大学部の松本皓学長と順正高等看護福祉専門学校の津尾佳典校長から、新入生の入学が許可されました。

松本学長は「常日頃から研鑽を積み、世の中の動きを正しく見抜く力を身につけてください」と式辞を述べ、津尾校長は「新しい生活をスタートさせるにあたって、ぜひ挑戦し続けることを持ち続けてください」と激励しました。また順正学園の加計美也子理事長は「志と目標を見失うことなく、キャンパスでの青春を謳歌してください」と告辞しました。そして、新入生代表が「入学の上は、学則を守り勉学に励み、人格の向上に努めます」と宣誓しました。

本年度も、こうして無事に新入生を迎えることができ、教職員一同、市民の皆様にご心より感謝申し上げます。学生たちも高梁での新生活に、当初は不慣れな点も多いかと思いますが、どうか温かく見守ってくださいますようお願い申し上げます。

■問い合わせ 順正学園入試広報室 フリーダイヤル0120-25-9944



## 成羽病院通信

■問い合わせ ☎423111

### 電子カルテシステムの運用を開始します

成羽病院は、5月1日から診療の指示や記録を電子的に扱う電子カルテシステムの運用を開始します。今回は電子カルテシステムの導入目的や特長などについてお知らせします。

#### ◆電子カルテシステムとは

現在のカルテは紙に書いています。患者さんの治療はカルテを確認しながら行うため、医師や看護師をはじめ、薬剤師、理学療法士、栄養士などの医療スタッフは、カルテが空くの待って担当する治療にあっています。

このため、チーム医療として効率よく効果的な治療を行うためにも、患者さんの医療情報をいつでもどこでも確認できる環境が不可欠になります。それを可能にするのが電子カルテシステムです。

#### ◆電子カルテシステムの効果

##### 情報の共有化

いつでも各部門のパソコンで、電子カルテの情報を見ることができ、リアルタイムに確認できます。複数の目でみることで、医療安全の質向上も期待できます。

##### 医療安全の向上

注射や投薬を実施する時、口頭での氏名確認に加え、バーコード等で確認しますので、誤認防止などの医療安全の向上にもつながります。

##### 情報のスピード化

実施内容がすぐにデータ化されるため、診断までの時間が短縮できます。また、カルテ運搬の手間が省け、待ち時間の短縮が期待できます。



運用開始に向けて、全職員が万全の体制を整えるために準備をしていますが、当分の間は想定外の不具合などで、受付や診療、会計などで時間が掛かることが予想されます。患者の皆さんには、何かと迷惑をおかけすることがありますが、ご理解とご協力をお願いします。

# 山田方谷を語る 五

## 有終館学頭時代

江戸を立つ時、師である佐藤一斎から「盡心」（わが誠をつくす）の大書を贈られた方谷は、誠意こそ学問や行動の基になることを心に刻みました。藩主板倉勝職について帰る途中、その学識・人物を認められ、翌月には有終館の学頭（校長）に任命されました。時に32歳、六十石と御前町に邸宅をいただき、学問研究と藩士教育に邁進していきました。

有終館は初代板倉澄澄が延享3（1746）年に藩士のための学問所として置いたことに始まり、四代勝政の寛政10（1798）年頃に藩校として整備され、有終館と命名され、教育組織も整えられました。内山下にあった校舎が焼失した時は、奥田楽山学頭の努力で、通学に便利な中之町（現高梁幼稚園）に再建され、藩がなくなるまでこの場所が続きました。

藩校では朱子学を教え、藩士の子弟は六、七歳になると入学し、句読師（助教諭）より四書・五経の素読を受けけます。素読は一人ずつ進度に合わせて音読し、覚えさせます。素読ができると会頭（教授）より論語、孟子などの講義を受けます。学頭は句読師や会頭を教えます。学問が進んだ人には歴史書（資治通鑑、十八史略、日本外史）や詩文唐宋八大家文や唐宋の詩）を教え、文章や詩をつくることを指導しました。

武術では剣、槍、弓など流派ごとに師範の指導があり、上達すると免許が出ました。方谷にとって、この時が学問に専念できる良い時代でした。34歳の元旦に作られた漢詩を、山田琢氏訳でみると

「藩庁での賀宴もおわり私邸に坐している書齋の窓辺で学業を始めよう元旦の詩はもうできたし去年の読みのこしの書物を開こう農耕に代わる俸禄で飢えることなく世俗と離れた役目で部屋は静かだもし生涯をこのままで送れたら必ずしも遠く世を避けるに及ばない」この詩を作った天保9（1838）年に、方谷は師達の薦めで、自宅に家塾も開いています。臥牛山の麓にあったので「牛麓舎」と呼ばれました。その当時は武芸を重視し、学問を軽くみる風潮があり、塾生が書物を携えて往来すれば悪口、暴行されるので、それを懐に隠して往来する状態でしたが、京都の寺島白鹿師の息子義一や倉敷の三島中洲、川面の進鴻溪、藩士のなかで意欲に燃えた大石隼雄など、常に数十名が学んでいました。藩士や進、三島などはのちに藩政改革で大いに活躍しています。

牛麓舎の理念として立志・励行・遊芸の三条が示され、まず学問研修の志を立て、熱心に学習に励み、人格を磨き、その教養で詩文を作り楽しむことを目指しています。

塾での生活は、狭い部屋で多くの人が学ぶので、規則として、学問に専念し怠けない、人を見下げず自分を誇らない、起床と就寝時間を守る、節度を持って出入りする、勝手に飲食



家塾牛麓舎跡

しない、無駄話をしないと決め、守れない人には、一、二度は注意するが更に違反したらすぐ退塾願を出すことが決まりで、塾生は熱心に自分で学習して、方谷の教えを受けました。ある日、勉強家の進鴻溪が口から血を吐いたのに本を手放さなかったので、心配した塾生たちが方谷に、「勉強をやめさせて下さい」と訴えました。ところが方谷は彼の様子を見て、「勉強しておれば治る」と言ってみんなの動揺を抑えました。暫くすると元気がなったようで、彼は生徒一人ひとりに実によく理解し、誠意をもって指導しました。

天保10（1839）年の大火事で再び有終館が焼失した時、方谷は学業再開を急務と考え、藩校の五か年間の経費を前払いして、仮校舎の再建を急ぐよう懇願しました。その結果、素読の声が聞こえるようになり、街に活気が戻りました。

（文・児玉享さん）

藩校有終館跡。奥に臥牛山が見える

